

白花種は此時季に播くと五月の下旬に食べる事が出来る。併しこれは莢が小さく繊維が多いので、莢豌豆としてはむしろ莢が大きくて柔い赤花が喜ばれる。

大豆は、大福、中福、鶉等々澤山の種類があるが、播付は至つて少く、何れも短い畝を五六本位しか作つてゐない。秋になつて實を收穫するといふことは殆んどなく、夏のうちに莢で食べてしまふ。

この外、葱、白菜、胡瓜、茄子等も家の近くへ申譯ぐらゐづゝ作つてゐる。

## 二 家畜

漁師は、百姓の様に自給飼料を得る事が少く、その上出稼ぎが多いので、家畜を飼ふ事には恵まれてゐない。昔の様に、肥料を施さなくとも馬鈴薯や、南瓜が澤山穫れた時代には、豚や兎は各戸に飼はれてゐたが、此頃は、自家用の野菜さへも満足に穫れないので

「口のあるものは片口もいらぬ」と云つて、みんな家畜の飼養を止めてしまつた。

現在飼養してゐる家畜のうちで、一番多いものは兎で、次は豚である。

### イ 兎

兎は飼料費が殆んどかゝらなく、路傍の雑草で飼育出来るし、繁殖が容易なので、女や子供等の仕事として丁

度よいので、大抵五六頭位飼つてゐる。多いところには三十頭位もゐる。

冬期は餌が不足勝なので、晩秋の仔兎を五六頭位、大根の干葉や馬鈴薯の屑などで飼つておく。

それが翌春三月頃になると、立派な若親になるので、青草の出る頃から繁殖にかゝる。

仔は、一度に普通五六頭位、多い時は十頭位も産むので、三頭の牝に二度づゝ産ましても、秋までに三十頭にするのは容易である。一頭の牝の分娩回数は、春から秋までの間で大體四五回位が普通である。

かうして繁殖させた兎は、十二月の末頃に、若いのを四五頭残して全部屠殺する。

毛皮は、上等な物は農會の手を経て陸軍へ納入するし、普通品は土地の毛皮商人に賣る。

値段はその年々によつて一定しないが、昭和十年の相場は、一枚七八十錢平均であつた。十年位前までは普通物で一枚一圓五十錢で飛ぶ様に賣れたが、近年は平均一枚一圓以上になることは珍らしい。

肉は雪の中へ埋めて置いて、大部分は自家用に使うが、多い時には賣ることもある。値段は一頭五十錢位である。

種類は、雜種のもものが斷然勢力を占めてゐるが、近時白色種ではニウジランド・ホワイト、イタリアン、メリケン等、有色種ではベルジアン、チンチラ等の高級種を飼ふ者も出て來た。

### ロ 豚

豚は魚菜屑で飼育出来るので、漁師の副業としては比較的良いものである。



當地で飼育されてゐる豚の大部分は、小型のヨークシャー種で、成體量は二十五六貫が普通である。

十年位前までは、黒色のパークシャー種も飼はれてゐたが、どうして絶えたのか現在では一頭もゐない。

豚は、春の仔を飼育して、翌年の春か夏賣るのが普通であるが、あまり太つてゐないものは尙秋まで肥育して賣る。

飼料は、野菜屑が主なもので、馬鈴薯、大根、甘藍、人参、南瓜等である。これに屑魚を少し混ぜて、釜で煮て與へるのである。

豚は毎年相場が變るが、平均十文位が普通の値段である。十文とは百匁十錢のことであるから、三十貫の成豚なら三十圓になる。

仔豚の値段は普通五六圓である。

約一ケ年飼育しての賣上げがこれだけである。この中から、仔豚代、燃料費、肥育用の米糠、南瓜、人参等を差引くと、二十圓位になる。努力はこれらに加へてない。

#### ハ 牛

牛を飼つてゐる家は極く少数である。

乳牛を飼つてゐる家は殆んど無く、みな生肉用の去精牛である。

牛を飼ひ始めたのは最近のことで、まだ一般に行渡つてゐない。

生後六十日位の仔牛を、一頭十五六圓で買つて、これを約一ケ年位飼育して四十五六圓に賣るのである。これは豚と違つて、動物質の飼料もいらぬし、飼料を煮て給與する必要もなく、路傍や、草の生えてゐる空地へ繫いでおけばよいのである。一日に二度位飲水を與へて、草の良い所へ繋ぎ替へてやるだけが仕事である。

牛は豚より遙に割が良いので、今後豚の飼育はだん／＼牛に變つてゆくことと思ふ。

飼育されてゐる牛の大部分は、ホルシュタイン種で、エアリーシャー種は稀にしかみえない。

#### 二 馬

七八年前までは、馬を飼つてゐる家も相當あつたが、近頃は随分少くなつた。

主として飼つてゐる種類は、中間種のアングロノルマンと、重種のベルシュロンである。輕種のサラブレッドや、アラブなどを飼つてゐる家はない。これらは高價であり、且つ勞役に向かないから、畠を耕したり、舟を卷上げたりに使用出来る種類を飼ふのである。

#### ホ 鶏

一番多く飼はれてゐる種類は、名古屋種と、これの雜種である。何れも少羽数の飼育であり、繁殖を母鶏孵化に依つて行ふため、就巢の念に乏しい白色レグホーン種等は、たとへ産卵が少し位多くてもあまり喜ばれない。

それに當地方産出の赤殻卵は、室蘭、登別温泉等で、産みたての地卵として評判がよいので、それなども白殻卵を産む鶏の歡迎されない原因である。



卵の販売には、室蘭、登別温泉、カル、ス温泉、幌別鑛山等の消費地を有してゐるので、他の地方よりは有利な立場にある。

### 三 其他の副業

島や家畜の外には目に見える副業は殆んど無い。

春は、筍や椎茸を採つたり、秋は山葡萄や茸類を採つて賣つたり、夏のうちは銀杏草拾ひなどが主なるものである。

室蘭地方は、富浦やアヨロなど、磯に岩のある所で銀杏草の採集が初まると、器械から落ちた銀杏草が流れて来て澤山上るのである。

朝早くから、皆は手籠を持つてこの銀杏草を拾ふ。

銀杏草は、乾燥したものが一貫匁六七十錢に賣れる。澤山上る朝などは、一人で四貫も五貫も拾ふことがある。

## 第十六章 冬の漁師の生活

當地の漁師達は、その大部分が、春から秋までの間を、各地の漁場で漁夫として働いてゐるので、自由に仕事をするのは、冬だけである。

秋漁季は十月下旬頃から終り出すので、その頃になると、漁場が切揚げた順に、漁師達はぼつぼつ家へ歸つて来る。秋漁季は遅くも、十一月末までには殆んど終つてしまふので、十二月に入ると、村では急に男が増えてなかなか賑やかである。

漁師達は、一年の大半を村から離れて暮してゐたからといつて、切揚げて歸つてから遊んでゐる餘裕もないので、來年の春漁季が始まるまで、何か仕事をしながら、冬期間を籠城してゐなければならぬ。冬期間の主なる仕事は、ホツキ巻や蟹網等であるので、漁師達は家へ歸るとすぐ、舟の修繕をしたり、網や網などを用意したりして、これらの仕事に取かゝる。そして、十二月の月は一日でも多く出漁して、正月を少しでも樂にする様に努めるのである。

かうして暮してゐるうちに、十二月の中頃になると、各地の漁場から、村へ「漁夫頼み」が這入つてくる。これは、來年の春漁季の漁夫を雇入れるために來るのである。



當地方の漁師は、近海の鱈場を始め、日本海沿岸の鯨場や、遠く、カムチャツカ半島兩岸の、鱈場や蟹場等へまで雇はれて行くので、各地の漁場では、他より早目に、前金を貸して契約して置かなければ、漁季になつても漁夫が無く、わざわざ南部（青森・岩手兩縣）まで頼みに行つたり、各地から一人二人と、未経験の者を高い給料で雇つたりしなければならぬ。それで、良い漁師を、比較的安く雇入れるため、年の瀬を見込んで来るのである。

一番早く来るのは、近海の鱈場である。これは、春漁季が四月上旬から七月下旬までなので、雇入契約も、最低四月一日から七月三十一日までである。給料は、一ヶ月二十七八圓位である。前金は、契約と同時に一ヶ月分位を貸すのである。

鱈場の次に来るのは、カムチャツカの鱈場と、蟹場である。

鱈場は、六月中旬から八月下旬までが漁季である。給料は、全漁季間が七拾圓位であつて、これを一度に全部前貸するのである。

蟹場の漁季は、四月中旬から八月下旬まで、期間は一番長い。その代り、前金も一番多く借りられる。全漁季間の給料は百二十圓内外で、これを全部前金として貸すのであるが、鱈場の様に一度に全部貸さない。前金はこれを一期と二期に分けて、一期は正月前、二期は年を越えてから貸す。一期と二期の割合は決つてゐない。このカムチャツカの「漁夫頼み」と前後して、鯨場の「漁夫頼み」が来る。

鯨場は、鯨の漁季が、三月中旬より五月下旬までの、僅か二ヶ月半位なので、給料も一番安い。普通、二ヶ月半で三十五圓位のものである。そして前金には、この内から、歸村の時の旅費に五圓を残して置いて、残額三十圓位を貸す。

鯨場は、一番割が悪い様であるが、これには一つ都合の良いことがある。それは、鯨場は漁季が短いので、他へ働きに行く前に、こゝで働くことが出来るのである。そのため、カムチャツカの鯨場へ行く者や、鱈場へ遅く納屋入りする者達は、大抵鯨場へも一緒に賣るのである。

この外、室蘭の港を根據としてゐる、「發動機船トロール」へ雇はれる者もある。これは、一ヶ月三十圓位の給料で、一ヶ月分位の前金を貸す。そして、これは別に漁季間を嚴重に契約するといふことはない。

漁師達は、この五つの變つた「漁夫頼み」のうちの、どれかへ身賣をして、それぞれ前金を借りる。これらの前金が手に入るので、濱の者達は、比較的樂に正月を迎へることが出来る。

前金を借りてしまふと、發動機船に雇はれた者だけは、すぐ室蘭へ働きに行く。他の者達は、三四月頃の、約束の日までを、ホッキ巻や蟹刺網や、ヤステ釣り等をして暮すのである。冬期間は時化が多いので、一ヶ月のうち十五日以上は、沖へ出られない日がつゞく。こんな日は、道具を繕つたり、薪を採つたりして暮す。



## 第十七章 無盡の話

無盡は、村に於ける唯一の、金融機關である。

娘が嫁にゆくとき、倅が徴兵検査のとき、又嫁を貰ふとき等を初め、家を建てるにも、舟や網を買ふにも、病氣をした時にも、無盡は一番利用される。村の人——と云つても、漁師達は特に多く、大抵二一本は有つてゐる。多い家は七八本も有つてゐて、毎月掛金が二十圓以上にもなつてゐる。

私はこゝに、村で行はれてゐる無盡に就て、簡単に、通俗的な説明を試みる。

正幸さんの家では、二十年も使つてゐたホッキ巻の磯舟が、すつかりボロになつて、もう使用に耐へない。それで、新しい舟をはぐ爲に無盡を起てる事に相談が決つた。

磯舟は一パイ百二十圓で出来る。現在家には五十圓程あるが、いろ／＼小さい事にも金がいるから、九十圓程の無盡を拵へたい。と云ふので、一本三圓掛で三十本の無盡にする事にした。

次に、大事な保証人を頼まなければならない。萬一の場合、全部責任を持つと云ふ様な、力のある人でなければ、皆は心配して加入してくれない。そこで、村でも相當信用のある米吉さんを頼まう、といふことになつて、正幸さん夫婦は、夕食後米吉さんを訪れて、

折入つて頼むと

「そんなら仕方ない。俺でも好かつたらなつてやるべ。なるべく堅い様な人ばかり、集めた方がいゝな。俺も二三人ぐらゐ見つけるから」

と心よく引受けてくれた。

夫婦はこれに力を得て、別々に、知人の間をそれからそれへと廻つた。

「……………それで、どうにもならないから、無盡でも建て、磯舟一ぱいはぐべと思つてね、隣りの米吉さんに保証人になつて貰つて、人集めに歩つてるのさ、濟まないけど一本入つて呉れられないべか」

「あゝさうかい、俺んところでも、四本もあるんで毎月の掛金に困つてるのさ。それでも先々月で、太郎大工さんとこの分が終つたので大分樂さ。まあ折角だから息子むすこの名前で一本入るべ。野郎にもそろ／＼、嫁こでも見つけるべと思つてるから」

「それはどうも、有難うござんす。それでは明後日の晚六時から始めますから、どうぞ願ひします」

かうして、募集してしまつたら、日を定めて皆に三圓づゝ持つて集まつて貰ふ。集合時間は大抵六時前後である。

皆が集まつたら、親元が

「皆様の御蔭で無事に豫定の三拾本になりました。厚く御禮申上げます。就ては隣りの岩倉さんで、息子さん



の嫁取支度に一本入れて戴き度い、と云ふんですが、豫定の本數に達してしまつたから、一應皆さんに相談してから、と云つて置きましたが、どんなものでせう？」

と、御禮券々増數の相談をする。皆はいろ／＼話合つて

「いゝでせう。一本位増えたつて。どうせ花圖も拵へなければならぬんだから」

「それでは、岩倉さんの花嫁さんの分を、花圖にするべ」

と満場一致で増數も可決される。次に保證人が皆の前へ出て、自分が此の無盡をどこまでも保證して、無事に終る様にする——と云ふ様な事を云つて、すぐ毎月の開催日や、花圖の額についての相談をする。甲論乙駁の結果、花圖は、五錢が二十本、十錢が五本、二十錢が二本、三十錢が二本、五拾錢が一本で、丁度三圓にした。そのうちに、親元のお禮のしるしの、五目ずしか牡丹餅が出る。皆がそれに舌鼓をうつてゐるうちに、紙片を大豆粒位に丸めた花圖がお盆の上に載せられて出る。三十人の人はそれを一つづつ取る。五十錢の人もあれば、五錢の者もある。悲喜交々の笑聲が起つて、第一回の幕は下りる。皆は圖札と引替に當つた金額を貰つて歸る。

翌月からは毎月、同じ日の、同じ時間に、必ず集まるのである。

第一回目は親元が皆から金を受取るだけであるが、二回目からは少し難しくなる。今こゝに第五回目の説明をする。

大塚さんの家では、長男の正男君が、今月の十日に、輜重兵特務兵に入營する。それで是非共此の無盡を落し

度い、と思つてゐる。ところがその裏の伊藤さんでは、隠居さんが區長に當選した祝賀會を、此の無盡を落して、やらうと思つてゐる。かう云ふ時にはせり札によつて決めなければならない。

當日、皆が掛金を持つて集つたら、そのうちで落し度い人達は

四十六錢也 伊藤

と云ふ様なせり札を書いて、小さく折疊んで出す。全部集まつたら帳場は、

「もう落し度い人は有ませんか、皆で四人ですね。それぢや、増引は有ませんか？」と聞く。

「私は少し多く入れたから二錢引きます」

「はい板久春治さん二錢引き」

と云つて紙片に書留めて置く、

「俺は一錢増すよ」

「はい大塚さん一錢増し」

と云つて、又書留める。

「さあもう増す人も引く人もありませんか、なかつたら札開きますよ」

と云つて帳場はお盆の中から札を一つ取つて開く、そして金額と氏名を読み上げる。



「伊藤さん四十六錢也、次は板久さん五十二錢也、二錢引きますから、丁度五十錢です。次は岩倉さん十五錢也。お次は大塚さん四十九錢也、一錢増しましたから丁度五十錢です。板久さんと合札になりましたが、板久さんが先開きですから、板久さんに落ちました。割戻は五十錢です」

これで第五回目は落札五拾錢であり、今回落した板久氏と、前回の四人を除いた、残り二十五人の人達は、最高落札額の五拾錢を割戻しとして貰ふのである。それで、落札者板久氏は、總額九拾參圓（三十一本分）より、花圖三圓と、五拾錢の割戻し二十五本分拾二圓五拾錢、合計拾五圓五拾錢を差引いた残額の、七拾七圓五拾錢を受取る勘定になるのである。

皆が花圖を引いて歸つてから、保證人の米吉氏は、七拾七圓五拾錢を懐中にして歸つた。それからしばらくして、板久氏は次の様な借用證を拵へて、米吉氏のところへ行つて金を受取つて來た。

金圓借用證

一金七拾八圓也 但シ平澤正幸氏發起積立無盡金

右之金圓借用仕り候處實證ナリ然ル上は昭和拾貳年壹月拾日ヨリ昭和拾四年貳月拾日マデ毎月拾日金參圓宛支拂フモノトス

後日爲念借用證一札差入置候如件

昭和拾壹年拾貳月拾日

幌別郡幌別村字本町

借用人 板久 春治

同村

保證人 岩倉 由春

同村

保證人 大塚 正男

理事

廣田 米吉 殿

此種の無盡は間違ひが殆んどないので安全である。現在は大半この「親建無盡」であるが、中にはまだ「親無盡」と云ふ、保證人もなければ、借用證もない危険なものもある。これは一名「廻り無盡」とも云つて、前月落した人の家で今月宿をするのである。昔はこの無盡が多かつた爲、よく逃げられたりして潰れたものであつた。こんな場合、先に落してゐた人は、もう掛けなくとも良いので、大いに儲けるが、まだ落さずに居た人々は大損害である。

この外に「品物無盡」と云ふのがある。

これは大抵一圓か、一圓五拾錢位の掛金で、十人か十五人位の小規模なものである。主として、おかみさん連



が集まつて拵へるのである。この無盡にはせりがない、圖で其月の當り人をきめるのである。そして當つた人は、其金額に相當した品物を、特約の商人から取るのである。物品は、蒲團皮、綿、座蒲團、毛絲類が多く、この外、メリヤス類や足袋、衣類などである。

特約してゐるのは、村の商人ではなく、みな室蘭から來る行商人である。

どの無盡も同じであるが、無盡に入つてゐるのは多く、「あまり金持でもなく、あまり貧乏でもない」人達である。これ等の人達が一番多く無盡を利用してゐる。この爲、三圓掛の無盡で普通一圓位せるのである。これが時に一圓三十錢から、一圓五十錢位までせり上る事がある。これを又利用する者がある、それは、小金を有つてゐる隠居や、少し金持の妻君である。これ等の人々は、最後まで落さずに、毎月の割戻しを儲けてゐるのである。三圓づゝの貯金に、毎月一圓平均の利子がつくのであるから、ずゝ分面白い利殖法である。

## 第十八章 遊びと唄

### 一 遊び

#### 1 歌留多

幾日も風が続いた後で時化が來ると、若い者連中は何を措いても、歌留多をしなければ納まらない。

「今夕六時より平澤氏宅に於てカルタ會を催す。會費二十錢。參戰を待つ。」

といふ様な簡単な廻狀が廻ると、六時半頃までには十人位の顔觸が揃ふ。

こゝに云ふ歌留多とは勿論百人一首のことであるが、東京のそれとは大いに趣を異にしてゐる。

讀札は歌を紙に印刷した普通のものであるが、取札は正月の切餅大の大札で、主として朴の木が用ゐられてゐる。綺麗に鈔をかけた白木に、墨黒々と、草書で歌の下の句が書かれてゐる。これは當地方では下の句だけが讀まれるからである。

ゲームは始んど源平戦ばかりである。一組は普通三人で、その内の一人は三十枚位を受持つて守備の任に當る。他の一人は六七枚位を持つて、敵を攻撃する。残つた一人は攻守兩人の間に坐つて、味方を掩護しながら戦



ふのである。

組の名稱には、血櫻組、隼組、雷電組など物凄いのがある。これ等が五組も六組も集つてリーグ戦をする時などは、午後六時頃から始つても、翌朝二時か三時でなければ終らない。

人数が揃ふと抽籤で戦ふ組を決める。そして残りの組のうちから、讀手と審判を選ぶ。最初の札を空札からふたと云つて、上の句から讀む。そしてそれにつゞいた次の札から取り始めるのである。空札の時は歌留多からふたにない歌が讀まれることも多い。

東海の小島の磯の白砂に……………

と啄木の歌を讀むインテリもあれば

から／＼と火葬場に残りし親父の罌丸

をかしくもあり悲しくもあり

などと變な歌を讀む者もある。空札を讀み終つたら、その下の句をもう一度繰返して次の歌の下の句へ續ける。

例へば空札の歌が

東海の小島の磯の白砂に

我泣き濡れて蟹と戯むる

であつたら、次は

我泣き濡れて蟹と戯むる

やくやもしほの身もこがれつゝ

と讀み、次はそれを更に上の句に直して

やくやもしほの身もこがれつゝ

乙女の姿しばしとどめむ

等々々の如く、讀み進めるのである。

悪戯讀みは空札の時ばかりではない。

山の奥さん鹿に追はれた(山の奥にも鹿ぞ啼くなる)

乙女のチャンコ火箸で突つつく(乙女の姿しばしとどめむ)

いくよ姉さん今晚は(いくよねざめぬ須磨の關守)

なが／＼小便五錢の罰金(なが／＼し夜をひとりかもねむ)

等々、いろ／＼にもちつて讀む。それでも取手は最初の三字位を聞いただけで、もう札を飛ばしてしまふ。猛者ばかりなので間違ふ様なことはない。

随分腕達者な者が多いので、戦もなか／＼烈しい。節くれ立った鐵腕が氣合と共に突出されるので、弾かれた札が三間も横へすつ飛んで窓ガラスを破つたり、絡み合つた手の下で厚さ二分の木札が二つに割れたりすること



も珍らしくはない。割れた札は裏から古葉書に貼つてすぐ使用する。

こんな凄まじい戦ひなので、手の甲や指には生傷が絶えない。傷いた者は「名譽の負傷者」として、皆にもてはやされる。

皆が戦ひ疲れた頃に茶菓が出る。この集りの中には必ず三四人の娘が混つてゐるので、それ等が接待に當る。夏季は菓子類が多いが、冬季は主としてヨカンベが出る。ヨカンベとは酒粕を解かして砂糖を入れて沸かしたものである。眞赤に燃えたストーヴの上に、大釜が沸々と湯氣を立てゝゐて、それを圍んで、皆は手柄話に花を咲かせながら、大きな飯茶碗で、代る／＼呑みつゞける。

それは、お正月にお座敷で行儀よく紙の札を並べて、上の句を讀んで下の句をとる都の人々には、想像もつかないものである。當地方での歌留多は最も男性的な遊びの一つに數へることが出来る。それは歌留多で遊ぶのもなく、歌留多を戦はすのでもない。歌留多で闘ふのである。

「人に知られてくるよしもがな」を「人に知られてくるよしもがな」と讀んだり、「人知れずこそ思ひそめしか」を「人知れずこそ思ひそめしが」と讀んだりして、無學な所を遺憾なく發揮する者も多い。

また歌留多の場所では種々な綽名が生れる。

いつも物凄腕前を見せてゐる者に「近藤勇」や「機關銃」「蟹將軍」などがあり、いつも負けてゐる者に「馬占山」「脱線親父」など香しからぬものもあるが、中には「乙女」などとしほらしい綽名の男もある。この

男は下手の横綱であるが、「乙女の姿しはしとどめむ」だけは、どんな遠方にあつても脱兎の如く飛出して両手に抱込み、曾て人手に渡したことがない、といふ愛嬌者である。

## 2 トランプ

トランプは主として女や子供の遊びに用ゐられてゐる。

男達が歌留多を戦はして、大騒ぎに騒いでゐる時など、次の部屋か、反対側の爐縁には、歌留多のグループから除かれた子供等に、歌留多の下手な娘達が混つて、時々かん高い笑聲をあげてゐる。そこへまた歌留多の方から敗軍の將達が割込んで來たりして、なか／＼盛んになる。

遊び方は、三十一競技、ページワン、ダウト、ジョーカー抜き、等々が主なるものである。

こゝでも歌留多の時の様に、「コール」を「ゴール」と言つたり「パス」を「バス」などと、なか／＼傑作が多し。

## 3 ほうびき

ほうびきは賣引から來たものらしい。

これは正月頃にだけ行はれる遊びで、其他の季節には殆んど見られない。

これを行ふには、三尺位の細紐を、人の數だけ揃へる。そして紐の一本には、一端へひょうたんか空のインク瓶を結んでおく。これをどつ／＼とさす。



正月の夜など、炬燵を圍んでこれを初める。

先づ親になつたものが、片方の手で紐全部の一端五寸位の所を握り、それを一卷手に巻いてから、長い方の端を、車座の真中へ投げ出す。さうすると人々は思ひ／＼に好きな紐を握る。みんなが取つた後で、残つた一本を親が取る。同時に紐の根本を握つてゐた手を放してみんなに紐を引かせる。そしてどつべの着いてゐる紐を引いた者が勝つのである。

お盆に山と盛つた蜜柑や、菓子をかうして勝つた者が一つづゝ取るのである。

ほうびきは、以前子供や女の遊びであつたのだが、近年は大人ばかりが男女混つてこれを遊び、子供は絶対加へられない。

4 花札

花札は、極少數の女を加へて、主として中年以後の男達に遊ばれる。

昔は青年達の間にもこの遊びは盛んであつたが、だん／＼向上するに従つて、歌留多や、トランプに轉向する者が多くなり、花札は青年達にかへりみられなくなつた。

花札も、正月を中心に冬季を主として遊ばれるものであるが、夏でも、時化つゞきの時などよく見受けることがある。

花札には、トッパ、七たん、よし／＼、三枚、さんちんさらし等々、いろ／＼な遊び方があるが、その方法の

説明は徒に紙敷を費すのでこゝでは省く。

二 唄 囃子 口遊び

大漁のあつた日の夜など、必ず酒が出る。爐縁を圍んで、赤銅色の逞しい腕から腕へ、盃が跳ぶ。そして宴酣になれば、いろ／＼な唄や口遊びなどが、それからそれへと、続けさまに飛び出して来る。

○安來節

わたしや 幌別 荒海育ち

浪も荒いが 氣も荒い

○囃子

野つく 山つく 踵さ糞つく

隣りの狗來て がんちと嚙つて

アテテコ テンテコ テンテコ テン／＼／＼／＼

○小原節

物の初まり一とも云ふ

馬に積むのは二(荷)とも云ふ



女の大役三（産）とも云ふ

小供の小便四（シー）とも云ふ

石を並べて五（碁）とも云ふ

侍取るのは六（祿）とも云ふ

物を置いて金を借りるは七（質）とも云ふ

ぶん／＼整すのは八（蜂）とも云ふ

貧乏するのは九（苦）とも云ふ

ハア 火箸を焼いて水に入れると

オハラ 十（チユウ）と云ふ

○囃子

ハア 兎の馬鹿野郎 十五夜の月見て

火事だと思つて 尻足ぶち上げて

ぼん／＼ ぶつ跳ねる

あとから もく犬 もつくらさつくら

○鱒釣くどき節

オイヤサエー

オイヤいたらないでや 峠の名主

二に二山か貉コの澤か

三に境コさ棒杭コ立てゝ

下へ下りや恵山のお山

上り三里に下りも三里

三里下りや榎法華村よ

嫌だ稼業鱒釣稼業

僅か給料五兩と二分で

鶏と同時に早起なさる

朝に起きれや朝火を焚いて

朝火焚付けてお飯鍋かけて

家内騒げば自づと騒ぐ

ちよいと漕き出すチチバナ沖さ

此處は何處よと船頭衆に訊けば



此處は昔の鱈釣場所よ

三十三枚さらりと配はいて

惠山お山の出る雲見れや

ひかた雲クはそろく上げる

昔年寄との警を聞けば

ひかた風とは人とする風よ

さあさ船頭さん支度をなされ

そこで船頭さん支度をなさる

白の襷たすきに白鉢巻はちまきで

三十三枚そろりと取りや

運の悪さに鱈三本油あぶら三枚

そこで押ししたり漕こいたり サイエー

○漁業更生旅笠道中

東海林太郎の「旅笠道中」が流行した頃、次の様な替唄が濱の若い者達の間で唄はれた。膽振水産會々長齋藤主計氏の作と云はれてゐる。

一 雪が解けたら俺らの春よ

沖に鷗うがのどかに啼ないて

やがて大漁網おろし

二 櫻咲くぞえ大助おほすけ鱈たかよ

鮮あざ小鮮海色變へて

大漁旗立つあ鵝川か沖

三 どうせやるなら漁師をおやり

浪と戦ふ海國男子

鱈も鮭も掴み取り

四 浪のまにまに寄せ来る鱈

盡つきぬ大漁俺らの主よ

獲とつておくれよたんまりと

○風の死刑の申渡し

肩先縣背筋郡縫目村、檣まろ屋や垢太郎の長男風之助、その方は禪十文字に忍び込み、巳うに大金を奪はんとする所、爪役人に覺られ、この野郎太い野郎と、手の平十文字に載せられ、巳うに火炙りにかけらるゝ所、罪一等を減



ぜられ、爪役人を以て潰し放し。

○虱の申譯

倅右衛門く虱之助、ぼつたぼとうやつづれえやにたかる段、この頃は騒るに就いて金襴緞子大目さんとめ迄も、恐れなくたかる段、且那様の衿元へ登りて花見宴饗を致す大體の不届者、爪役人を以て一々御詮議を致す、何程の御議を蒙つても苦しくは御座無候。

○屁の申譯

へーへーと隔てりや隔てるやうなもの、これも我身から出ると我子同然のもの、腹空いてよし、病きれてよし、尻のつりこみ拂つてよし。

○

猫にマタタビ南部衆にメノコ

(うっかり傍へ寝せておかない)

○

譬と豆腐汁投げ所無い

○

眼病者と蕎麥練りネる程よい

(寝ると練るとを掛けたシャレ)

三 アイヌに傳へられた日本の口遊び

(我々よりも三四代前に、村から村へ渡つて歩く旅のシャモが、これを傳へたのだといふ。旅のシャモとだけで、如何なる種類のものか判然しないが、唄の言語から考へて、東北地方から來た遊藝人であつたらしい。文句は相當に訛つてゐるらしいが、要所要所の意味は通つてゐる様に思ふ。上段には原文を片假名で表記し、下段に於てその意味を出来る限り判讀して見ようと思ふ。)

鎌倉の門前の

吾妻太郎の息子は

杓子打つ名人で

杓子打つ道具は

鑿に匏に反匏

引絡いて引背負つて

一の坂も蹴上り

二の坂も蹴上り

三の坂の坂の坂中で

カマクラノモンチェンノ

アンヅマタロオノムスコハ

シャクシウツメンチンテ

シャクシウツトシコハ

ノミニカンナニソリカンナ

シツカラカイトテシツチウテ

イチノサカモケアンカリ

ニイノサカモケアンカリ

サンノサカノサカナカテ



コシヲヂツクラヤスマヘテ  
 アタルヤホトルヤミイタレバ  
 イチニイタヤニニヤナンキ  
 サンニサクラヨンジノキ  
 ゴヨウマツノムクノキ  
 ブツカケタデヤブンナノキ  
 キツカケタデヤキリノキ  
 ハンノキナントモアイマザツテ  
 シヤクシキモチニブンテ  
 シヤクシヲサンチウフバタイテ  
 オサカノマチヘタソウカ  
 チウノマチヘタソウカ  
 チウノマチヘタシタレバ  
 チオザドオノシロムクト  
 チオザドオノクロムクト  
 クワンクワントホエタレバ

腰をチツクラ休ませて  
 邊りやほとりを見たらば  
 一にイタヤ二に柳  
 三に櫻楊枝の木  
 五葉松に椋の木  
 ぶつかけたでや山樺の木  
 きつかけたでや桐の木  
 榛の木なども相雜つて  
 杓子木も丈夫で  
 杓子を三丁引叩いて  
 大阪の町へ出さうか  
 京の町へ出さうか  
 京の町へ出したれば  
 長者殿の白尅と  
 長者殿の黒尅と  
 クワンクワンと吠えたらば

サツテモニツクイイヌツコダ  
 イヌノコンバナカアケルカ  
 シヤクシノコンバナカアケルカ  
 ポンクラポントナゲタレバ  
 シヤクシノコンバナカケナイデ  
 イヌノコンバナカケタ  
 シヤクシマイナミツサイナ

さても憎い犬ツコだ  
 犬の小鼻缺けるか  
 杓子の小鼻缺けるか  
 ポンクラポント投げたらば  
 杓子の小鼻缺けないで  
 犬の小鼻缺けた  
 杓子うまいな見さいな

○

ロクンカツノヒンデリニ  
 チャワンチャワンダカニントノ  
 ホッホラホ ホッホラホ  
 ホッホラホトハンデキテ  
 カラスナントノエセントリ  
 パホリパホ パホリパホ  
 パホリパホト トンデキテ

六月の早に  
 チャワンチャワンだ蟹殿  
 ホッホラホ ホッホラホ  
 ホッホラホとハンデ來て  
 鴉などの似而非鳥  
 パホリパホ パホリパホ  
 パホリパホと飛んで來て



カニントノノコオラヲ

ホッキリホ ホッキリホ

ホッキリホト ツツツイタレバ

アンマリイカイタテヤカラストノ

オマイモイキモノオレモイキモノ

オヤチニシナイノハサミツコ

サヤツコカラツトハントシテ

キリキリ キリキリ

キリキリツトシメタ

カニマイナミツサイナ

蟹殿の甲羅を

ホッキリホ ホッキリホ

ホッキリホと啄たれば

餘りイカイだでや鴉殿

お前も生き物俺も生き物

親兄弟の鉄コ

鞘コカラツと外して

キリキリ キリキリ

キリキリツと締めた

蟹うまいな見さいな

#### 四 子供の遊びごと

##### ○ミミツチの遊び

街の子供等が、驛の待合や、店先で、石蹴りや、鬼ごっこをして遊ぶ様に、山の子供等が、牧場の柵に攀ち登つて、それを足場に蹠馬に跳び乗つて遊ぶ様に、濱の子供達は、きらきらと果てしなく続く黒砂と、白い齒を見

せて岸に戯れる小波とが友である。

併しそれも秋から春へかけては、波が荒かつたり、冷い風や雪に邪魔されてゐるので、本當に濱に親しむことの出来るのは、盛夏の候に限られてゐる。

さんさんと降りそそぐ眞夏の陽の光を、眞黒な體一ぱいに浴びながら、裸の子供達は海豹の群の様に、熱い砂の上に寝そべつてゐる。

そして、それ等の誰もが皆、砂へ小さな穴を掘つて、その谷底へ荏胡麻粒位の大きさの眞黒な蟲を放して、

「ミミツチ、ミミツチ、お前のお父ちゃん死んだから、穴掘つて埋けれ埋けれ！」

と云ひながら、谷底から這ひ上らぬ様に兩手で堀を拵へてゐる。

ミミツチはけんめいに攀ち登らうと努力するが、坂はいつも中腹からさらさらと崩れて、その度にもとの谷底へ轉げ落ちる。四度、五度、同じことを繰返すうち、ミミツチも遂には諦めて、せつせと坂の中腹を掘つて砂の中へ潛つて行く。

子供達はそれを見て喜びながら、

「ミミツチ、ミミツチ、お前のお父ちゃん死んだから、穴掘つて埋けれ埋けれ！」

と簡単な節をつけて歌ふ。

##### ○軍艦遊び



陽の光と砂の熱で體が暑くなつてくると、子供達は渚へ行つて軍艦遊びを初める。軍艦を拵へるには、二三人共同でなければ出来ない。

先づ足で飛行船形の舟型を砂上に畫く。そして、その線の上を、體の方から表の方へ、手早く砂を盛り上げて行くのである。砂は艦の内と外から盛り上げるので、中は大きな穴になり、外は舷に沿うて溝になる。表は波に崩れ易いので、藁屑や、ゴモヤ、昆布の屑などを積み重ねて、その上へ砂を盛る。

かうして出来上つたら、大將を表にして順々に艦に乗込む。そして大きい波の來るのを待つのである。

交互に押寄せて來る波のうちでも、比較的沖の方から背を高くして來て、岸近くで大きな口を開けて、がばつ！と噛みついて來るが、つば折りは、その姿に似合はず力が無いのである。反對に、岸近くで急に頭を擡げて、ざざ！と押寄せて來る引波は、人相に似合はない底力を有つてゐる。

軍艦を破損するのは、きまつて此の水量と水勢の豊かな引波である。

波が艦の兩舷を崩しながら、ひたひたと押寄せては、何ごとも無くすうつと引いて行くと、子供等は一齊に雙手を空高く擡げて、

「うわーっ ばんざー！」

と、大自然を征服した歡びの聲を張上げる。

併しこんな嬉しいことは長く續かない。時折豫想だもしない大波に襲はれて、一同は頭から濡れ鼠になり、艦

は跡形もなく消えてしまふこともある。

こんな事に逢ふと、子供達はあつさり諦めて、潮水に濡れた體を、熱い砂の上に轉がして、胡麻餅の様に砂にまぶれて暖まる。

來る日も來る日も、こんなことを繰返してゐるので、赤銅色の肩や背の皮膚が薄く剝けて、ひりひりと痛むのである。

○いさだ掬ひ

女の子には女らしい遊びがある。

水につかつて遊ぶことに、いさだ掬ひがある。

小さな波がさあ！と押寄せて來て、すう！と引いて行く時に、裾をからげた女の子が二人、手拭を兩方へ張つて、いさだの群を掬ひあげる。調子の悪い時には一匹も獲れないが、運のよい時は一度に兩手で一ぱい位獲れる。

獲つたものは、バケツか金盃に潮水を汲んで置いて、その中へ放しておく。澤山溜つた頃に男の子達が來て、それを手掴みにして頬張る。口邊や指先などに附着したいさだが、びちびち跳ねてゐても、平氣でぶつぶつ音を立てながら食べてしまふ。

十年程前に、房さんといふ六十歳位の跛の人がゐて、いさだ獲りを生業にしてゐた。



風の良い、天気の良い日は、毎日渚に立つて、葡萄蔓の曲物に、晒木綿を張つた道具で、波を曳き曳き、房さんはいさを抱つてゐた。

波の届かない程の所に、手桶が一つ置いてあつた。小さな波を二三枚掬つて、いさが少し溜ると、それを持つて上つて、手桶の中へ溜めるのである。

桶から少し陸の方の、乾いた砂の上には、薙が二三枚敷いてあつて、薙には炒米の様に乾燥したいさが、くつ著いてゐた。

房さんはこのいさを、熬子にして賣つてゐたが、間に合はなかつたと見えて、一年位で止めてしまつた。

○まゝごと  
いさを抱ひの外は、乾いた砂の上でまゝごとをする。

丁度、家の設計圖のやうに、砂の上に足で線を引いて、玄關・臺所・客間などを拵へる。そして、ホッキ貝や女郎貝の殻を食器にし、昆布や、海苔や、濱豌豆などを御馳走にして遊ぶ。

隣家が二三軒出来て、始終往つたり、來たりする。食器や漂流木等の家具は、潮水を汲んで來て洗ふし、足跡だらけになつた座敷は、雑巾掛けをするのだ、と云つて、手で綺麗に均らして掃除する。

男の子の遊びごとは其の日限りであるが、女の子の、特にまゝごと遊びは、何日も繰返される。まゝごと遊びの出来ない雨の日など、湯殿や、縁側の區切りの線が、處々消えてゐて、雨水の溜つたホッキ貝のお椀の中に、

濱豌豆の實が三つ四つ揺れ動いてゐる家を見ることがある。

### ○風揚げ

風揚げ遊びや、風の種類などは、他地方と略、同じであるから、その詳しい説明は省いて、こゝではたゞ違つてゐるものだけに就いて述べる。

角風（繪や字を書いてある普通の四角風）や奴風の外に、かすべ風といふのがある。

これは十字形の骨へ、菱形の紙を張つて、下の角へ尾をつけただけの簡単なものであるが、絲目のつけ方が、他のどの風よりも難しい。十字形の横骨は、裏から弓形に絲で締めて、風受けを良くする。そして縦骨と下端へ表から絲目をつけて、絲目の上から三分、下から七分目位のところへ、揚絲をつけるのである。

かすべ風は、その形がかすべに似てゐるので、この名がある。風を揚げる時、唸りといふものをつける。

唸りは、長さ五寸、幅二寸位の紙を、横骨を締めてゐる絲につけて、五分間に切込んで、丁度暖簾のやうにしておくのである。

唸りをつけた風を揚げると、障子の破れ目から風が吹込んだ時のやうな音を立てて唸る。その音は相當大きく聞えるので、遠方の飛行機の爆音を聞くやうである。

風が中天に舞ひ揚つてゐる時、古葉書などの真中へ小さい穴をあけて、揚絲の端をそこから通して、紙を風の



方へ上げてやる。紙は風が強くなる度に、つゝつとと紙を傳つて、風の方へ近づいて行く。すると又次の紙がその後を追ひ、第三、第四の紙が順々に綱渡りをして上へ登つて行く。子供等はこれを「風さ無線電信やるんだ」と云つてゐる。

○竹割

竹割とは、竹を、幅五分長さ七八寸位に、割つて拵へたもので、同じものが四本で、一組になつてゐる。

竹割をして遊ぶのは、冬の屋内に限られてゐる。但し、冬の遊びと云つても、決して爐端や疊の上であるのではない。疊や英産は傷がつくし、起つたり坐つたりして五月蠅いので、家では臺所か爐端に遠い窓ぎは、學校では廊下と、何れも板の間の寒い所である。

十年位前までは、竹割は男の子の遊びで、たまに女の子などが混ると、「お轉婆する！」とて、母親達が叱つたものであつたが、此頃は女の子が皆お轉婆になつてしまつて、到頭竹割も、男の子の遊びから、女の子の遊びに變つてしまつた。

竹割をして遊ぶには、「ばつた」「なげ」「たち」「まい」「ねんじり」「かいし」「わり」「なげかいし」「きり」と九種の變つたやり方があつて、何れも同じことを十三回繰返すのであるが、たゞ最初の「ばつた」だけは四回でよろしい。「ばつた」が間違なく出来たら、更に「なげ」「たち」「まい」と順々に十三回づゝ繰返しながら進むのであるが、途中で駄目になると次の者が交る。そして自分の番になると、前に駄目になつた所か

ら又續ける。一人がやつてゐる間、他の者は休んでゐて、その人と一緒に聲を合せて

「一二二つ、三つ四つ、五屋の息子さん、何言つて、八釜しい、此處らで、飛んで、大阪、見物、一べん」

と節をつけて數へる。かうして最後の「きり」へ行くのであるが、「きり」は十三まで數へて駄目にならない時は、そのまゝ百まででも二百まででも、續く限り續ける。

勝負は「きり」の數の多寡によつて決まるのである。

○ねつき遊び

ねつきとは、直径一寸位の太さで、長さ一尺位の、一端を鋭く尖らせた棒切れのことである。ねつき遊びは、すなはち、この棒切れを使つて勝負をする遊びである。

ねつき遊びをするには、粘土質の場所が一番よい。こゝへ直径二尺位の圓を描く。二人以上なら、何人でも出来る。

先づ、じゃん拳で負けた者が、自分のねつきの尖つた方か、若しくは頭の方を握つて、勢よく手裏劍のやうに投げて、粘土の上に描いてある圓の中へ突立てる。次の者は、そのねつきのすぐ傍へ、それを倒すやうにして打込む。次の者も、又次の者も、同じやうに、敵のねつきを倒し、同時に自分のものが安全に突立つやうに、打込むのである。

このやうに、一同代る／＼打合つてゐるうちに、地盤が次第に耕されて來て、もしも誰かゞ下手に突立てたり



すると、その次の者の打込んだねつきのために、倒されることがある。かうして倒されたねつきは、倒した者の所有に歸するのである。

ねつきを打込む時、手元が狂つて、横倒れになつたり、頭が浅く突立つて、そのままふらふらと倒れたりすることがある。こんなのは、あいはと云つて、圓の外へ取除かれる。そして、次に倒した者が、その倒れたねつきと一緒に、あいはのねつきも取つてしまふ。

上手な者は、泥だらけのねつきを、一抱へも勝取つて、それを藁縄でからげて、家來に背負はせて、方々へ轉戦する。

負けた者は、家の横に積んである薪の中から、手頃なのを引抜いては、新しいのを五六本拵へて、すぐ戦に加する。

#### ○釘倒し

ねつき遊びは、十五六年位前までは、十二三歳から十四五歳までの男子の遊びとして、非常に盛んであつたが、現在では何處にも見ることが出来ない。

その代り(?)、それに似たもので、釘倒しなるものが出来て来た。

釘倒しは、その名の示す如く、釘を倒す遊びで、ルールは大體ねつき遊びと同じであるが、たゞ土俵が、あれは徑二尺の圓であつたのに對して、これは直徑三寸といふ豆土俵であるのと、あいはは取除かすに置いて、圓外

へ突き出した者がこれを取る、といふ違ひがあるだけである。

ねつき遊びもさうであるが、釘倒しは危険な遊びである。びかびか光る四寸五寸といふ大きな釘を、二十本も三十本も、多いのになると五六十本も、ポケットにがらりと詰め込んで、かはるがはる、ぶすっ！ぶすっ！と打込んで、時折かちっ！と音をさせて闘はせる。これが時々見當が狂つて、人の足などへ突刺さることがある。

そのほか、手には四六時中生傷が絶えないし、服のポケットは、裏も表も、穴だらけになつてしまふ。

### 五 子供の唄

#### 1 てまり唄

手鞠は方言でテンマリと言つてゐる。テンマリ唄には次の如き種々のものがある。

○

イチレッツ談判破裂して

日露戦争會ひに来る

サッサと逃げるは露西亞の兵

死んでも盡すは日本の兵



- 五萬の兵を引連れて  
六人残して皆殺し  
七月八日の戦ひは  
ハルビンまでも攻入つて  
クロバトキンの首をとり  
東郷大將バンベンザイ  
十一浪子の慕詣り  
十二は二宮金次郎  
十三讃岐の石の下  
十四は四國の金比羅さん  
十五は御殿の八重櫻  
十六ロク屋の小僧さん  
十七質屋の番頭さん  
十八濱邊の白兎  
十九は楠正成で

二十は東京二重橋

○

- どんどうはいやどんどう  
どんどうは二やどんどう  
どんどうは三やどんどう  
どんどうは四やどんどう  
どんどうは五い上り  
さくろは一匁  
さくろは二匁  
さくろは三匁  
さくろは四匁  
さくろは五い上り  
千萬さく一匁  
千萬さく二匁  
千萬さく三匁



千萬さく四匁

千萬さく五い上り

いの

さの

月の子

サアお出で

マアお出で

私がちよいと

勝つてもしよ

負けてもしよ

お酒の子

○

おはぐろ沸し一匁ヒイヒイ

おはぐろ沸し二匁ヒイヒイ

おはぐろ沸し三匁ヒイヒイ

おはぐろ沸し四匁ヒイヒイ  
 おはぐろ沸し五い上りヒイヒイ  
 かみとかし一匁ヒイヒイ  
 かみとかし二匁ヒイヒイ  
 かみとかし三匁ヒイヒイ  
 かみとかし四匁ヒイヒイ  
 かみとかし五い上りヒイヒイ  
 かたはらひ一匁ヒイヒイ  
 かたはらひ二匁ヒイヒイ  
 かたはらひ三匁ヒイヒイ  
 かたはらひ四匁ヒイヒイ  
 かたはらひ五い上りヒイヒイ  
 お白粉ねり一匁ヒイヒイ  
 お白粉ねり二匁ヒイヒイ  
 お白粉ねり三匁ヒイヒイ



お白粉ねり四匁ヒイヒイ  
 お白粉ねり五匁上りヒイヒイ  
 お白粉つけ一匁ヒイヒイ  
 お白粉つけ二匁ヒイヒイ  
 お白粉つけ三匁ヒイヒイ  
 お白粉つけ四匁ヒイヒイ  
 お白粉つけ五匁上りヒイヒイ  
 頬紅つけ一匁ヒイヒイ  
 頬紅つけ二匁ヒイヒイ  
 頬紅つけ三匁ヒイヒイ  
 頬紅つけ四匁ヒイヒイ  
 頬紅つけ五匁上りヒイヒイ  
 口紅さし一匁ヒイヒイ  
 口紅さし二匁ヒイヒイ  
 口紅さし三匁ヒイヒイ

口紅さし四匁ヒイヒイ  
 口紅さし五匁上りヒイヒイ  
 先づ先づ一貫貸しました

(手鞠をつきながら、「おはぐる沸かし」とか、「かみとかし」とか、その都度両手で手早く、おはぐるを沸す真似や、髪を梳く真似を各五度づゝ繰返へすのである。)

○  
 一丁目の二番地  
 三角山の白ベエが  
 五月の六日  
 七りんで焼けどして  
 くすり屋へ飛んで行つた

○  
 伊勢 伊勢 新潟  
 三河 信州 神戸  
 武蔵 名古屋 函館



九州 東京 京都

大阪 奈良 見物

○ 一番初めは一の宮

二また日光東照宮

三また佐倉の宗五郎

四では信濃の善光寺

五つは出雲の神社

六つ村々鎮守様

七つ成田の不動様

八つ八幡の八幡宮

九つ高野の高野山

十で東京心願寺

2 あやとり唄

お手玉のことを方言でアヤ又はアヤコといふ。アヤとり唄には次の如き種々のものがある。

○

いつもたんたん太鼓豆太鼓

油でしようならトツテモコイヨ

○

いつもたんたん武男が嫁とつて

姉さんそんなこといふもんぢやないよ

○

片道向うのお山のボンボン時計が

鳴つたか鳴らぬか儂や知らぬ

トツテモコイヨ

○

片道向うの朝鮮帳場が

立つたか立たぬか儂や知らぬ

コイナ



○ お一つ、お二つ、お三つ、お皆んな  
お皆返しておつてんバラリン

ジ・キナ、ジ・キナ

ジ・キモアンメー

アンメー、アンメー

アメも大しこ

大しこ、大しこ

だいたいびつき

びき千年から千年

とつても隣りのお客様に

一貫も貸せば如何で

お一つ

○

チャカくくくく

ピードンドン

印度の土人は色黒く

支那のチャンくくはかみ長し

日本男子は櫻色

○

青葉しげちやん昨日は

いろいろお世話になりました

私今度の日曜に

遠くの學校へまわります

あなたもよくよく御勉強

なされてください

たのみます

(楠公父子訣別の歌「青葉しげれる櫻井の……」の節で歌ふ。)

### 3 縄跳び唄



○ ひーや、ふーや

みはたの爺さん

頭巾、かぶつて

トットと走る

お宮、まわりの

爺さん婆さん

サアお逃げなさいよ

○

大波、小波

風吹いて山

一ッ二ッ三ッ四ッ五ッ六ッ

七日で通ふ

○

「お嬢さま」

「お這入り」

「はいよろし」

チャンケンボン

「負けたお方は

お逃げなさい」

○

さくらさくら

彌生の空は

見渡す限り

いざやいざや

もろともに

4 その他

○

昨夜産れた猫の仔が



お母ちゃん、んのダンベに爪立てた  
お母ちゃん、んは喫驚して醫者招んだ  
醫者も喫驚してカモ立てた

○ お月さまえらいな

なんて間がいんでしょ

正直爺さんボチ借りて

敵は幾萬ありとても

桃から生れた桃太郎

○ (尻取文句である。)

○ 縁だ縁だハイカラさんが縁だ

頭髮の真中に蠟燭の壺焼

何んて間が好んでしょ

○

南京豆屋のハダおやぢ

ハダも照せば探海燈

飛行機軍艦よく照らす

ハダもヤツバリ役に立つ

○

學びの庭に糞垂れて

校長先生に叱られて

小使さんにさらはれて

恥かしい恥かしい共々に

## 六 子供の口遊び

○

新しく掘返した畠の土塊の下から、ケラ蟲がよく這ひ出して来る。男の子はこのケラ蟲を見付ると、親指と人差指との間にそれを挟んで、

バア婆のダンベ何んだだけだ？







「……………」

「XXさんと呼んでも返事が無い

花嫁さんでも取つたのか？」

○

月から

火が出て

水かけて

木さんの

畢丸

泥だらけ

（村に空さんと稱し奉るお爺さんが居る。このお爺さんは一件が握り飯よりもデカイので有名である。子供達は空さんの一件を憶ひ泛べつゝこの文句を誦する。）

○

何處だかの

ガンベ童

滑つて轉んで

泣いてゐる

起してやりたいけど

ガンベ傳染る

（ガンベは瘡蓋のこと）

○

何處だかの

バン婆ア

十八で

兵隊検査サ

行つたつけ

畢丸無くて

戻されたとセ

○

轟轟



油揚あぶらあげやるから

廻れ 廻れ

(大空に鷹が舞つてゐるのを見て)

○

鴉 鴉 勘三郎

お前の家が焼けたから

早く行つて水かけろ

(夕焼時時に急ぐ鴉を見て)

○

夕焼 小焼

明日 天氣に なあれ

(履いてゐる下駄を飛ばして、表が出たら天氣、裏が出たら雨になる、としてゐる。)

○

蟻山火事だ

米背負つて

逃げレ逃げレ

(蟻塚を掘返して、澤山の蟻が右往左往する様を見ながら言ふ。)

○

ホ、ホ、螢來い

あま水來い

行燈の光をちょと見て來い

○

蜻蛉 蜻蛉

あま水けつから來い

(「けつから」は「けるから」、即ち「呉れるから」の意味である。)

○

猿の尻眞赤けつまつかつか

牛蒡焼ごんぼいてブッ附ける

○

揃た揃たよ奴さんが揃た



捕たら皆で踊ろぢやないか  
スットコドッコイヤヤサ

○  
左様奈良三角

又来て四角

四角は豆腐

豆腐は白

白は兎

兎は跳ねる

跳ねるは蚤

蚤は赤

赤いはホウヅキ

ホウヅキは鳴る

鳴るは尻

尻は臭い

臭いは便所

(二人の兒童が連れ立つてやつて来る。別れ途へ来て、一方が「さよなら」といふ。すると他方がそれを受けて「さよなら三角」といふ。更に一方がそれを受けて「又来て四角」といひ、他方が又その尻を取つて「四角は豆腐」といふ。かうして交互に相手の文句の尻を取りながら各自の途を遠ざかつて行くのである。)

○  
陸軍の、乃木さんが、

凱旋し、進め、目白、

ロシヤ、野蠻國、

クロバトキン、罌丸、

マカロフ、禪、締めた、

高シャツポ、ボンヤリ

○  
(これも前同様の尻取文句である。)

○  
昔むんづけて、話はんづけた

(昔嘶をせがまれても氣のすままない時の逃げ文句である。下記の二者いづれも然り。)



○ 昔むじり着て  
話はじり着て  
行つてしまつた

○ 昔あつた尻 婆尻

豆一升挟つた尻 取つた尻  
ガフラ

○ 赤ベテン子さん風揚げた

電信柱さ引掛つた

お父ちゃんお母ちゃん取つて呉れ  
梯子が無いから取られない  
アーンアーン

○

泣きべそ小べそ

酒屋の狐

米背負つて逃げた

(相手を泣かして置いて)

○

お前達兵隊さんのカモ見たか  
細くて長くて毛ッコ三本

○

兵隊さん兵隊さん

出雲の國を出る時は

赤いシャツポにダン袋

キチミチ喇叭で押掛ける

○

政吉けっばれ

けっばれば一錢だ



一錢でも錢コだ

○

よし子、よさん子、はまなし子

餅搗いて食はせないば

馬鹿よし子

○

坊主ぼっくり山芋

煮ても焼いても喰はれない

○

加藤清正

廣東豆五升食つて

お腹が太鼓で

お尻が喇叭で

ブカトンブカトン

○

イッチキ、ニッチャ、ニサイソ

馬の仔ッコ、ツマカニ一本

タイシキ十

○

イヤ大きに三錢五厘

(「そんな馬鹿げたことがあるものか」といふ意味の時云ふ)

○

ひっちゃん、ひがつく、ひんりゅうの

ひりき、ひばりき、ひでかいて、ひんぶくろ

ひっても、ひっても、ひりきれない

(誰かの面前で、その人に對して何等悪意があるのではなく、稍からかふ様な氣持で唱へる文句である。秀吉とか秀子とかさういふ名の子供に對してはこのまゝで安當する。併しこれが眞志保といふ名の子に對する場合であつたら頭音の「ひ」は全部「ま」に代へて「まつちゃん、まがつく、まんりゅうの、…まつても、まつても、まちきれない」となる。更にこれが三太郎といふ名の子供なら同じ要領で「まつちゃん、まがつく、まんりゅうの、…まつても、まつても、さりきれない」となつて、全くのノンセンスである。それでも一向構はないのである。)



○ ひっちゃん、ひがつく、ひんり。うの  
ひりこんまの、ひり男  
ひった、ひった

(前と同じ)

○ 一二三、たまこのち  
めぐらかけ。この十

○ 痛かつたら

いたちの糞

三年つけれ

(誰かへ何かして「痛い！」と言つた時すかさずかう唱へてませつかへすのである。)

○ ダルマさんダルマさん

睨みジャツコやりませう

笑へば抜かす

アップ!

○ ひとり、ふたり、さんめのこ

よ。たりめの、糞さらひ

○ ど、れ、が、よ、か、べ、か、な、と、な、り、の、お、ち、い、さ、ん、に、き、い、て、み、れ、ば、  
わ、か、る

(澤山ある物の中から一つを採ぶ時、かう唱へながら端から順々に一つづゝ指さして行つて、最後に指の當つたものを取る  
のである。)

○ 死んでも生きても嘘こくな (指切りの唱へ言)

○ 疣、疣、橋渡れ (他人の手足に着など渡して)



○ 俺の齒育つて

鼠の齒脱けれ

(脱けた齒が上の齒だつたら縁の下へ、下の齒だつた屋根の上へ、投げながら唱へる。)

○

○ 南瓜かぼちゃが芽出して

花咲いて開いて オッチョコッチョイノッチョイ

○

たけのこへのこ

おがる次第に 皮剥ける

○

どんぐり元來禿頭

帽子冠れば好い男

北海道幌別漁村生活誌 終



索引

ア

アイ... 15  
 あい(風)... 140  
 アイサ(鳥)... 47  
 あいしもかぜ(風)... 140  
 あいたまかぜ(風)... 140  
 アイヌの延縄... 56  
 あいば(ねつき遊び)... 192  
 アイマワリを知る法... 141  
 青海魚... 38  
 青鮫... 29  
 アオナ(鴨)... 48  
 青鱈... 26  
 赤えび... 38, 39  
 赤腹(ユグイの雌)... 131  
 赤ボツキ... 72  
 秋漁季(アキシノ)... 99, 159  
 アキヤチ(鮭)... 25  
 秋味(アキアチ)... 66, 119  
 アゲのない針... 56  
 アサダ(樹名)... 54  
 アサツキ(エゾネギ)... 70  
 麻繩... 100  
 アザラシ... 19, 39, 113  
 鱈... 35  
 アシ(刺網の)... 100  
 アシ石(")... 100, 101  
 アシタナ(")... 99  
 網代金... 94  
 後山... 77  
 アナゴ—その漁期... 33  
 穴釣り(鰻)... 129  
 アバ(刺網用)... 102  
 用材... 102  
 網一反に着くその数... 102

アバタナ(刺網)... 99, 102  
 アバラ(磯舟部分名)... 52  
 油貝... 44, 81  
 アブラコ(魚名)... 32  
 油鮫... 29  
 油鱈... 30  
 甘栗(南瓜の品種)... 23  
 アマニウ... 67  
 アマニヨ... 68  
 網  
 キユル... 109  
 刺す... 105, 109  
 サヤメル... 101, 109  
 タク... 101, 109  
 チドル... 101, 109  
 洗ひ... 108  
 サシ... 108  
 網引のハヤシ... 16  
 雨鱈... 26  
 アヤ(お手玉)... 201  
 アヤトリ唄... 201  
 アウタ(刺網)... 99  
 アンカ... 15, 100  
 —網... 103

イ

烏賊... 28  
 —釣り... 49  
 イケマ... 8  
 いさだ掬ひ... 187  
 イサバキッキキ(木の棒)... 122  
 五十集籠... 107  
 五十集屋... 87, 93  
 石持(鰻)... 30  
 磯舟... 36, 50  
 部分名... 51



附属品 .....	53
大きさと価格 .....	53
板久孫吉 .....	130
板鱈 .....	26
一匁針 .....	56
銀杏草 .....	158
イチヤニウ .....	127
イト(魚名) .....	43
一産卵期 .....	133
緯クラゲ .....	136
イトム・ブライ .....	69
イノウ(木幣) .....	60
イノウ・ケ・マキリ .....	68
イノウサン(神籬) .....	69
薯	
種類 .....	151
値段 .....	152
パン .....	152
海豚 .....	113
鰻 .....	21
漁期 .....	25
春漁季(ハルシノ) .....	80
網 .....	36,51
鰻場 .....	160
岩魚 .....	41
ウ	
鵜 .....	49
受雲 .....	141
兎 .....	154
値段・肉の貯蔵・種類 .....	155
牛 .....	156
値段 .....	157
ウタ(車轡の部分名) .....	54
ウデ木(マンガン) .....	74
鰻 .....	43
一飯き .....	129
一捕り・その餌 .....	128
一釣り .....	129

一突き .....	129
ウノドリ(鶴) .....	49
ウバ貝 .....	43
ウバ鰻 .....	29
馬 .....	157
海雀 .....	48
ウミタカ .....	49
海で獲れる魚 .....	25
梅干の忌 .....	146
孟蘭盆 .....	23
ウルシの木 .....	102
ウルメ鰻 .....	25
ウワコビリ(磯舟部分名) .....	52
エ	
エゾニウ .....	67
エンド(薙刀香需) .....	68
エンドと水 .....	60
オ	
大鱈 .....	27
大時化 .....	141
大助(名魚)・その漁期 .....	26
大ヒラゴ(鰻) .....	25
大鮪 .....	28
陸廻り .....	87,107,109
沖で陸の話をおむ事 .....	60
沖繩(延縄) .....	58
オシドリ .....	48
オニヤステ .....	112,114
オバウシサバ .....	126
オヒヨウ(鰻) .....	30,57
おぼばいらくさの皮 .....	56
オモチ網(ホツキ巻) .....	78
オモチのネバリ(磯舟部分名) .....	52
オモチマンガン .....	74,78
オヤク(月と日の暈) .....	141

カ

貝 .....	43
カイゴ(鮫側) .....	51,52,67
かいし(竹割の遊び方) .....	190
カイヂリ(磯舟部分名) .....	52
海鳥 .....	46,111
カイビキ(磯舟部分名) .....	54
化学肥料 .....	151
カガテント .....	50
カガミ板(マンガン) .....	75
カガミ金( " ) .....	75
鏡鯛 .....	37
各種生産額 .....	9
角風 .....	189
カギ .....	122
カギ(蟹刺網) .....	104
カサ木(マキドの部分名) .....	55
カシラ(マンガン) .....	74
カシラ網(マンガン) .....	74
ガス .....	21
粕漬(鰻) .....	27
カステラ(南瓜の品種) .....	23
粕干し女 .....	19
カスベ .....	111
かすべ風 .....	189
風の名 .....	139
カチ穴(磯舟部分名) .....	52
鯨 .....	29,41,111
漁期 .....	29
釣り餌 .....	134
カチキ .....	36
鯨節代用品 .....	27
ガツカラ鴨 .....	48
カド鮫 .....	29
蟹 .....	39
一網 .....	39,46,51,93
一經營法 .....	94
値段 .....	95

漁獲高・種類 .....	97
漁期 .....	97,99
棲息地帯 .....	98
拾ひ .....	98
刺網の部分と附属品名 .....	99
刺網の方法 .....	105
漁の人員と舟の数 .....	105
刺網の網数 .....	106
漁撈 .....	107
蟹網の副産物 .....	110
蟹網の副業 .....	117
かねしめ漁場 .....	121
カノ(雄蛙・雄鰻) .....	119
鹿ノ子鮫 .....	29
買子(かひこ) .....	95
楓 .....	54
南瓜 .....	23
種類 .....	153
追肥 .....	116
釜焚 .....	19
釜前 .....	19
鎌谷岩吉 .....	3
カムイクル .....	61
カムイ・フチ .....	69
龜 .....	38
鴨 .....	81
カモ貝 .....	45
鴨 .....	49
カヨイセン .....	50
穀ボッチ .....	79
鴉片 .....	41
ガラス玉 .....	104
鴉の巢 .....	143
歌留多 .....	169
鯨 .....	81,110
漁期 .....	30
刺網 .....	37
川網(ユグイ) .....	132
河鱈 .....	30



カワサキ	50
川で獲れる魚	40
川漁	119
川の漁場権	121
カン(マンガン)	74
玩具	46
間食	152
金成漁場	121
雁の腹雲	141
ガンビ	54, 55
甘藷	153
肝油	27

キ

木碇	69
キウリ(魚)・その漁期	33
キジカチカ(鯨)	29
ギボシ(銀寶)	67
キテ	62
キナボ(マンボ)・その漁	36
木鉤	69
魚菜市場	79
漁夫の賃銀	160
魚肥	25, 35
きり(竹割の遊び方)	190

ク

釘倒し	192
串	90
くだり(風)	139
くだりやませ(風)	139
口黒鱈	26
口笛	148
屑貝	45
汲舟	19
熊坂(河豚)	27
海月	135
—が飛ぶ話	138
車欄(クルマガイ)	53

用材	53
黒鯿	39
黒頭(鱈)	30
黒鴨	46, 111
軍艦遊び	185
軍手	107
クンネ・ニトライ	69

ケ

ケアゲ(磯舟部分名)	52
毛蟹	39, 97
毛替蟹	98
ケタ(延縄部分名)	56
尻白ボッキ	73
ケラ蟲	207
ゲンゲンボウ(魚)・その漁期	34
現在人口動態	7
現在戸口	4

コ

小鱈	35
五月鱈	26
小鯖	27
腰引	16
ゴッコ	32, 111
漁期	32
コナゴ・その漁期	35
小鯨(鯨の名)	25
コヒ(小陽)	142
小ヒラゴ(鯨)	25
コビリ(舟の部分名)	53
コマイ(魚)・その漁期	35
小鮪	28
ゴメ(海鳥)	19, 49
—の高上り	143
ゴロ・その用材	54, 55, 107
ゴンド鮪	28
昆布	45

サ

サイダ(マキドの部分名)	55
サガ釣り	49
サキベ	127
櫻鱈	26
鮭	26, 42, 119
漁期	26
漁獲法	120
漁場名	121
漁期	125
値段	126
卵を産む巢	119
打殺す時の棒とその説話	122
一束の本数	125
調理法	126
刺網	26
(鱈)	93
(鮭)	120
(鯨)	27
(鰯)	27
(ナマコ)	37
早權(サツカイ)とその用材	54
鯖・その漁期	27
サバルシ	70
サビタの木	68
サブロ(魚)	34
鮫・漁期	29
鮫鱈	30
サルガニ	42
猿の忌	147
さんちんざらし(花札の仕方)	174
サンバ	50
産火の忌	146
秋刀魚	35

シ

椎茸	158
シウリ(樹)	54

辭苑	44
潮蛤	27
潮吹き(貝)	45
鹿の生角で遊へたハナレ	57
鹿角	68
シカベ(鳥)	49
仕切書	80
シクツツ	70
シクツツ(あさづき)	126
シケタル漁場	121
シコロ(樹名)	55
シジメ(櫓の部分名)	53
シチ木	55, 107
シチリ(鳥)	47
シツカップ	67
シテ(マキドの部分名)	55
シド(延縄部分名)	56
科(シナ)の皮の繩	56
品物無盡	167
しの(漁季)	72
シマ鯛	37
竊ボッキ	72
しもかぜ(風)	140
しもかぜやませ(風)	140
下鳴り	144
出漁中の忌禁	60
出漁の静め	60
出産と漁	146
シユネ	123, 125
主要漁獲物	10
シユリ貝	45
職業別戸口	9
女郎貝	44, 73, 81
シリカップ(カヂキ)	36, 59, 67
種類	65
食法	66
シリカップ・キテ	68
汁かけ飯の禁	146
白ボッキ	73



ス	
水田	151
鮭・その漁期	27
錫掛針	57
鱈・その漁期	36
スダレ	105
砂鱈	30
するめ	28
セ	
セイシ鴨	47
切羽ホッキ	72
節分の豆	147
セリ(鰯)	80
せり札(無盡)	165
仙臺引場	121
ソ	
ソイ(魚)・その漁場	34
葬式	146
宗八(鰯)	30
東(そく)	125
蕎麥貝	44, 81
タ	
鯛	37
堆肥	150
大漁旗	19
高井和市	127
鷹ノ羽(鰯)	30
タカマ	57
タカマ穴(磯舟部分名)	52, 53
瀧本金蔵	3
筍	158
竹割(玩具)	190
竹割の唄	191
蛸	81, 113
漁期・雌雄	27
箱	27
田代漁場	121

たち(竹割の遊び方)	190
大刀魚	34
建網	26, 27
鰯	32
フクラギ	36
たまかぜ(風)	140
鱈・その漁期	27
タラガニ(鱈蟹)	39, 97
タラバガニ	37
ダンプ(浮木)	104
チ	
チェンチエン(魚)	34
チカ	33
チカッブ	49
チタタッブ	70
チタダブ	126
地曳網(鮭)	122
中鯖	27
中ヒラゴ(鰯)	25
チヨノメ(磯舟部分名)	52
ツ	
ツカ鮫	29
ツナギドリ(鳥)	48
ツナダリ(磯舟部分名)	52
唾と餌	148
ツブ	112
ツム	103
爪(マンガン)	74
釣り	26
餌	25
釣竿を股ぐな	148
つるうめもどきの皮	56
テ	
手籠	16, 158
出稼	160
テグリ網(蛸)	27

(鰯)	32, 93
(カスベ)	38
テックイ(鰯)	30
鐵ボート(マンガン)	74
てまり唄	193
天気豫知法	140
デントコーン(植物)	23
テンボ	101, 106
テンマリ(手まり)	193
ト	
トウ(筈)	120
トウベツ(鰯)	29
玉蜀黍	152
トウキビ	152
トウキミ	152
値段	152
種類	153
トカイ(舟)	50
トコ(磯舟部分名)	52
鱈	41
トッカリ	40
トッパ(花札の仕方)	174
トビウヲ(魚)	34
遠飛サンケウタの場所(漁場)	121
トモ車(マンガン)	75
トモのネリバ(磯舟部分名)	52
トモマンガン	74, 78
トラリ(革紐)	123
取ダンプ(マンガン)	75
(ホツキ巻)	78
泥ボッキ	72
唐鉄(とんが)	151
虎杖(どんぐい)	64
ドンコロ	69

ナ	
中チヨ(舟の部分名)	51

流網	26
薙刀香鬚	68
ナギリ(磯舟部分名)	52
なげ(竹割の遊び方)	190
なげかいし( )	190
灘繩(延繩)	58
七(なゝ)たん	174
ナベコワシ(鰯)・その説話	29
ナマコ	37
並魚(ナミヨ)(鮭)	126
ナメラ河豚	27
納屋入り	161
柁	54
縄付(鮭)	126
縄跳び唄	203
ニ	
二打柁	77
ニガニヨ	67
にしたまかぜ(風)	139
にしひかた(風)	139
鰯・その漁期	26
ニタリ貝	45
日進上人	3
鵜鮫	29
ネ	
蘆	23
ネコ(磯舟部分名)	52
ねつき	191
相網(ホッキ巻)	78
(マンカン)	74
ネリバ(舟の部分名)	54
ねんじり(竹割の遊び方)	190
ノ	
農業	150
ノセ板(マンガン)	74, 76
野邊地方言集	69
ノラボ(魚)	42



乗子(ノリコ) .....	76
ハ	
ハイノシリ(磯舟部分名) .....	52
延縄 .....	56
(蛸) .....	27
(鯉) .....	32
(カスベ) .....	38
ハエヘ .....	69
ハカイチヨ .....	18
バカ鯉 .....	25
ハクドク(魚) .....	33
ハサキ(櫓の部分名) .....	53
ハセ .....	107, 109
ハダチヨ(舟の部分名) .....	51
ハタハタ(鱒) その漁期 .....	36
漁期・値段 .....	82
出漁小舎がけ .....	83
鉢 .....	70
バチエラー .....	21
ばつた(竹割の遊び方) .....	190
パッチ .....	70
鳩鯉 .....	39
花圃(無盡) .....	164
花クラゲ .....	136
ハナヤステ .....	115
ハナレ .....	57
ハネカヂ(磯舟部分名) .....	52
ハーバート(南瓜の品種) .....	23
婆鯉 .....	30
ババヤステ .....	114
漬豌豆 .....	21
蛤 .....	44, 46
ハマナシ原 .....	21
ハモ .....	33
ハヤオ(櫓へかける紐) .....	52
春漁季(はるしの) .....	99
棒 .....	54, 55
一の枝 .....	90
馬鈴薯 .....	151

馬鈴薯の元肥 .....	116
番屋 .....	50
ヒ	
燧袋 .....	68
ビウチヨブ(燧袋) .....	68
びく .....	40
漁夫頼み(ひとたのみ) .....	159
ヒトデ(海整車) .....	114
一尋の長さ .....	107
一ノシ(ひとのし) .....	97, 107
一配(ヒトハへ) .....	107
一丸(刺網) .....	99
一人巻(ホッキ巻) .....	77
火の老女神 .....	69
雲雀の雛 .....	22
肥料 .....	115
開鯉 .....	27
ひらご .....	46
ピンコ(鮭の小さいもの) .....	126
フ	
フグ(魚鱧) .....	130
河豚・その漁期 .....	28
食ふ時の唱言 .....	148
中毒した時 .....	148
食ひ方 .....	148
フクラギ・その漁期 .....	36
袋ウタ木(マンガン) .....	74
豚 .....	155
値段 .....	156
豚鯉 .....	30
フヂコ(ナマコの種類) .....	37
斑ボッキ .....	72
舟の互種 .....	50
船材 .....	52
舟主(フナヌシ) .....	76
舟賃 .....	110
舟をけぐ .....	162
部落別戸口(昭和十年) .....	5

鱈・その漁期 .....	36
ヘ	
ヘイケタネシ(鳥) .....	47
ヘカチ .....	69
ベタ蟹 .....	98
蛇の忌 .....	147
ヘラガニ .....	39
ペロカヂカ(鯉) .....	29
ペロ鯉 .....	27
辨當 .....	59
ホ	
帆 .....	54
ほうびき .....	173
朴 .....	54
方言學概論(橋正一氏) .....	38
棒鯉 .....	27
坊主クラゲ .....	136
防風(植物) .....	20
防風取り .....	20
乾鯉 .....	59
ホッキ(貝) .....	43
種類と棲息地 .....	72
ホッキ巻 .....	51
漁 .....	71
元祖 .....	71
漁期 .....	72
経営・分配 .....	76
税金 .....	77
漁撈 .....	77
一圓所要時間 .....	79
處理 .....	79
副産物 .....	80
解禁 .....	80
値段 .....	80
ホッケ(魚)・その漁期 .....	35
ホッチ(舟) .....	50
ホッチャリ .....	119

頼被り .....	16
ホヤ .....	38
ホリを掘る .....	119
幌別地名傳説 .....	1
ボンズ(マキドの部分名) .....	55
本鯉 .....	41
ボンデン .....	104, 106
ほんにし(風) .....	139
ほんやませ(風) .....	139
マ	
まい(竹割の遊び方) .....	190
真烏賊 .....	20
前山(まいやま) .....	77
真鴨 .....	46
真鯉 .....	30, 57
巻網(蟹網) .....	107
アキド(舟を巻上げる具) .....	54
マキ棒(マキドの部分名) .....	55
鮎・その漁期 .....	28
増引(無盡) .....	165
鱒 .....	21, 43
漁期 .....	26, 126
真蛸 .....	27
真鯉 .....	27
マチカチ .....	69
マッケ .....	61, 69
窓(家の正面の方へ開いてゐる) .....	69
(神籬へ向いてゐる) .....	69
真河豚 .....	27
前ウタ木(マンガン) .....	74
豆烏賊 .....	28
豆クラゲ .....	136
豆河豚 .....	27
豆鯉 .....	147
マユイ(刺網) .....	103
魔除 .....	39
マル鯉 .....	25
丸木舟 .....	59



廻り無盡	167
マンガン	71
マンガンと附属品	73
部分名	74
胴	74
袋	74
マンガンと附属品の値段	76
マレク	122, 123
マンヂユウヤステ	112, 114
アンポー・その漁期	36

ミ

ミックサ(鱈)	30
密漁(鮭)	123
ミミッチヨ遊び	184
唄	185
ミナミ	15
みなみ(風)	139
みなみくだり(風)	139
みなみひかた(風)	139
ミヨシ(磯舟の部分名)	52
三分け(みつわけ—分配法)	77
味酥干	27

ム

剥ボッキ	79
ムグリ(コナゴ)	35
鱒齒と赤鯉の毒	39
無盡	162
ムダマ(舟の底部)	51
(磯舟部分名)	52
ムチ(魚)その漁期	36
ムリッチ原	19
宍(むろ)	152
室蘭の行商人	168

メ

メカヂキ(女柁木)	67
メサ	69

メス又はメシ(雌鮭・雌鱒)	119
目はり	17

モ

モッコ	108
モミヂヤステ	115
鮎(シリカッブ漁)	68
穂尖	68
柄	68

ヤ

焼ボッキ	72
ヤコ(お手玉)	201
ヤサカギ	69
ヤス	41
ヤステ	81, 108, 112
種類	114
肥料の仕方	116
乾燥法(砂干・棚干)	116
価格	117
釣の季節	117
釣法	118
縄	118
ヤス突(鮭)	120
ヤス(鰻突き)	129
八ツ目	42
ヤトイ(漁夫)	144
ヤドカリ	39
柳	55
柳蟲	40
ヤマ	77
やませ	90
山田治兵衛	3
ヤマ綱(マンガン)	74
山ノ神(鮓)	29
やまべ	40
山伏(鮓)	30
ヤメ(延縄部分名)	56
槍烏賊	28

ヤリ縄(刺綱)	103
---------	-----

ユ

ユグイ	41, 131
漁期	33
漁季	131
釣り	131
焼干	132

ヨ

夜網の合圖	17
榮鷲	157
ヨカンベ	172
横蚤	143
よしよし(花札の仕方)	174
撰り(鮭)	126
漂流木(ヨリキ)	85

ラ

ラシユバ	62, 68, 123
------	-------------

リ

漁師の迷信	146
漁の豊凶の占	147
龍神祭	146

レ

レクラ・ニトライ	69
----------	----

ロ

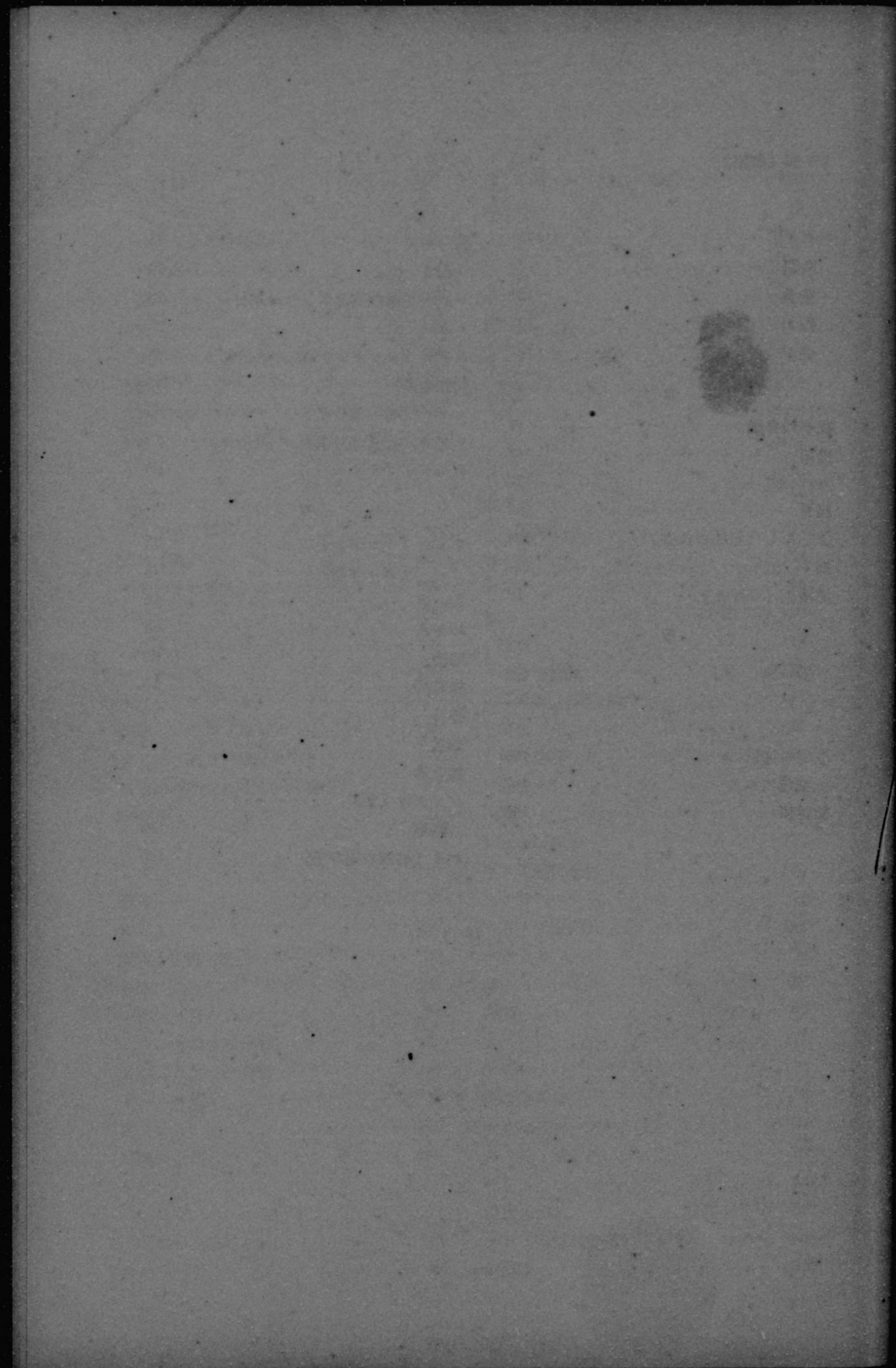
櫓	53
長さ	53
ロウデ(櫓の部分名)その用材	53
ロクロ	73
ロクロ(マンガン)	75
肋膜の薬	42
ロザラ(櫓の部分名)	53
ロヂク(磯舟部分名)	52
ロルン・ブライ	69

ワ

ワイヤ(マンガン)	75
(ボッキ巻)	78
若い者	16
わかめ	45
脇櫓	53
神番兵	19
神舟	19
綿雲	143
渡り鳥	49
ワラヂカ(魚)	67
漁期	33
わり(竹割の遊び方)	190

[ 終 ]







昭和十三年七月廿五日發行

北海道幌別漁村生活誌  
定價 貳圓五拾錢

版權所有

發行者	佐藤三太郎
印刷者	高木一夫
印刷所	東京市芝區三田綱町十番地
發行所	東京市芝區三田綱町一〇番地

發賣所

東京芝區三田二ノ一  
丸善株式會社三田出張所  
電話三田(45) 一九九二二  
振替東京 一八五二七六



アチツク ミュージウム 刊行書目

○アチツク ミュージウム彙報

〔一第〕 早川孝太郎校註  
愛知縣北設樂郡下津具村  
村松家作物覺帳

〔内容〕 本文菊判一六八頁・圖版及  
圖表一七圖・地圖・索引  
定價 金壹圓五拾錢  
送料拾四錢

〔二第〕 竹内利美編  
小學生の調べたる  
上伊那川島村郷土誌

〔内容〕 本文菊判一〇〇頁  
圖版七三圖・地圖・索引  
定價 金壹圓八拾錢  
送料拾四錢

〔三第〕 武藤鐵城著  
羽後角館地方に於ける  
鳥蟲草木の民俗學的資料

〔内容〕 本文菊判三七〇頁  
圖版二圖・地圖・索引  
定價 金壹圓八拾錢  
送料拾四錢

〔四第〕 吉田三郎著  
男鹿寒風山麓農民手記

〔内容〕 本文菊判一八二頁  
圖版二四圖・地圖・索引  
定價 金壹圓五拾錢  
送料拾四錢



高橋文太郎著

〔五第〕 武藏保谷村郷土資料

〔内〕 本文菊判二〇二頁  
〔容〕 圖版四七圖・地圖・索引

定價 金貳圓五拾錢  
送料拾四錢

内田武志著

〔六第〕 静岡縣方言誌

〔内〕 本文菊判二七〇頁  
〔容〕 方言分布地圖・五葉  
〔動物六二項目・植物二八項目〕

定價 金參圓八拾錢  
送料拾四錢

竹内利美編  
小學生の調べたる

〔七第〕 上伊那川島村郷土誌續編

〔内〕 本文菊判二二五頁  
〔容〕 圖版二三圖・地圖・索引

定價 金貳圓八拾錢  
送料拾四錢

知里眞志保著

〔八第〕 アイヌ民俗研究資料一

〔説話第一〕

〔内〕 本文 原文一三頁  
〔容〕 菊判 譯文二七頁

定價 七拾錢  
送料三錢

アチツク ミューゼム編

〔九第〕 所謂足半(あしなか)に就いて

(近刊)

〔〇一第〕

復刻 稻塚和右衛門著

木實方祕傳書

雲落檀樹植林製蠟手記

〔内〕 本文菊判一五四頁  
〔容〕 圖版一七面・地圖・語彙

定價 壹圓七拾錢  
送料拾四錢

〔一一第〕

宮本常一著

周防大島を中心としたる海の生活誌

〔内〕 本文菊判三〇六頁、圖版  
四一圖。寫真三葉。地圖。索引

定價 貳圓八拾錢  
送料拾四錢

〔二一第〕

山口和雄著

九十九里舊地曳網漁業

〔内〕 本文菊判三三五頁、圖版  
十七圖・地圖・索引別表  
菊判全紙大一半裁大二

定價 參圓  
送料廿二錢

〔三一第〕

進藤松司著

安藝三津漁民手記

〔内〕 本文菊判三三八頁、圖版  
寫真二二圖・凸版三〇圖  
索引・別刷地圖四葉

定價 參圓  
送料廿二錢

〔四一第〕

内田武志著

静岡縣方言誌

分布調査 第二輯 童幼語篇

〔内〕 本文菊判一九六頁  
〔容〕 方言分布地圖二葉  
〔童語篇一八。幼語篇一〇七。童戲篇六。〕

定價 貳圓參拾錢  
送料拾貳錢



〔五一第〕 アチツク ミューゼウム篇  
刻復 狩獵古記録二篇

(近刊)

〔六一第〕 吉田三郎著  
男鹿寒風山麓農民日録

〔容内 本文菊判四七〇頁  
寫眞五〇圖附録〕

定價 參圓六拾錢  
送料 拾四錢

〔七一第〕 知里眞志保著  
アイヌ民俗研究資料二

謎・口遊  
び唄

〔容内 本文菊判一三五頁  
誌以下十八項目〕

定價 九拾錢  
送料 拾錢

〔八一第〕 祝宮靜考註  
江州野洲川築漁業史資料

〔容内 本文菊判二三八頁・圖  
版一三圖 地圖 語彙〕

定價 貳圓五拾錢  
送料 拾四錢

〔九一第〕 佐藤三次郎著  
北海道幌別漁村生活誌

〔容内 本文菊版二二二頁  
寫眞 圖・索引〕

定價 貳圓五拾錢  
送料 拾四錢

〔〇二第〕 澁澤敬三編著  
豆州内浦漁民史料 上卷

〔容内 本文菊判五六四頁  
圖 版二 四 圖〕

定價 八圓  
送料 貳拾貳錢

〔一二第〕 船遊亭扇橋著  
刻復 奥のしをり

〔容内 本文菊判一〇三頁附  
録四〇頁・圖版・地圖〕

定價 壹圓九拾錢  
送料 拾四錢

〔二二第〕 丹田二郎著  
越後三面村布部郷土誌

(近刊)

〔三二第〕 宮本常一著  
河内國瀧畑左近熊太翁舊事談

〔容内 本文菊判三〇六頁  
圖 版二 二 圖〕

定價 貳圓六拾錢  
送料 拾四錢

〔四二第〕 澁澤敬三編著  
豆州内浦漁民史料 中卷之壹

〔容内 本文菊判六八四頁  
圖 版一〇 圖〕

定價 七圓  
送料 貳拾貳錢



〔五二第〕 内田武志著  
静岡縣方言誌 分布調査 第三輯 民具編 (近刊)

〔六二第〕 小野武夫著  
宇和島藩 漁村經濟史料 (近刊)

〔七二第〕 アチツク ミューゼウム編  
宇和島藩漁村經濟史料補遺 (近刊)

〔八二第〕 拵嘉一郎著  
喜界島食事日誌 (近刊)

〔九二第〕 アチツク ミューゼウム編  
社會經濟史料雜纂 第一輯 (近刊)

○アチツク ミューゼウム ノート

〔一第〕 アチツク ミューゼウム編  
民具問答集  
〔内〕 本文菊判三一九頁 各項毎ニ寫眞  
項目一二〇。地圖・索引  
附録民具 蒐集調査要目  
頒布價 金貳圓五拾錢  
送料 拾四錢

〔二第〕 山口和雄著  
内房北部の漁業と漁村經濟  
〔内〕 上下 本文菊判六二頁・地圖  
二頁・索引  
頒布價 各 金五拾錢  
送料 各六錢

〔三第〕 櫻田勝徳・山口和雄著 (隱岐調査報告一)  
隱岐島前漁村採訪記  
〔内〕 本文菊版一八三頁  
寫眞二圖・地圖・索引  
頒布價 金壹圓五拾錢  
送料 拾錢

〔四第〕 櫻田勝徳著 (隱岐調査報告二)  
糸満漁夫の聞書  
〔内〕 本文菊版三十二頁  
寫眞一頁・糸満語彙  
頒布價 金三拾錢  
送料 三錢

〔五第〕 櫻田勝徳・山口和雄著  
美保・廣島三津・伊豆大三島 漁村採訪記  
〔内〕 本文菊判二一頁  
地圖  
頒布價 金三拾錢  
送料 三錢



〔六第〕 岩倉市郎著  
喜界島調査要目  
〔内〕 本文菊判一二頁  
(非賣品)

〔七第〕 アチツク ミューゼウム編  
民具蒐集調査要目  
〔内〕 本文菊判一六頁  
圖版四面  
(非賣品)

〔八第〕 櫻田勝徳著 (土佐漁村探訪旅行報告一)  
伊豫日振島に於ける舊漁業聞書  
〔内〕 本文菊判六四頁  
地圖  
頒布價 金五拾錢  
送料 六錢

〔九第〕 櫻田勝徳著 (土佐漁村探訪旅行報告二)  
土佐四十川の漁業と川舟  
土佐漁村民俗雜記  
〔内〕 本文菊判五五頁  
地圖・寫眞  
頒布價 金五拾錢  
送料 三錢

〔〇一第〕 伊豆川淺吉著 (土佐漁村探訪旅行報告三)  
土佐鰹漁業聞書  
〔内〕 本文菊判五三頁  
地圖  
頒布價 金五拾錢  
送料 三錢

〔一一第〕 藤木喜久磨著  
新島探訪錄  
〔内〕 本文菊判五〇頁  
寫眞二十四面・地圖  
頒布價 金八拾錢  
送料 三錢

〔一二第〕 高橋文太郎著  
秋田マタギ資料  
〔内〕 本文菊判九〇頁  
寫眞二二圖・地圖・索引  
頒布價 金壹圓參拾錢  
送料 六錢

〔一三第〕 金子總平編  
熊狩雜記  
〔内〕 本文菊判七六頁  
寫眞一二圖・地圖・索引  
頒布價 金壹圓  
送料 六錢

〔一四第〕 アチツク ミューゼウム編  
北部多島海巡航備忘錄  
(近刊)

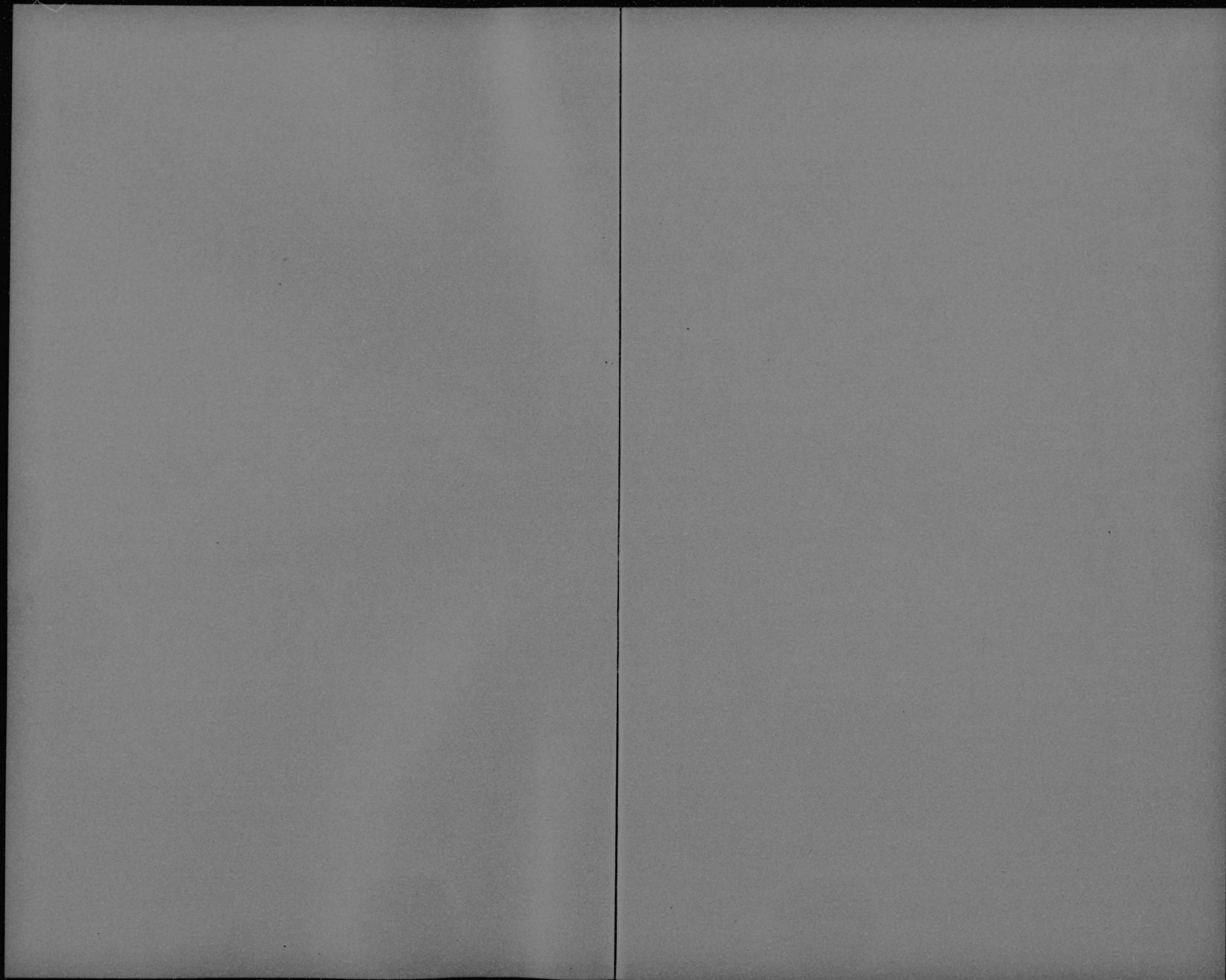
〔一五第〕 アチツク ミューゼウム編  
蔚山邑達里農村見聞錄雜纂  
(近刊)



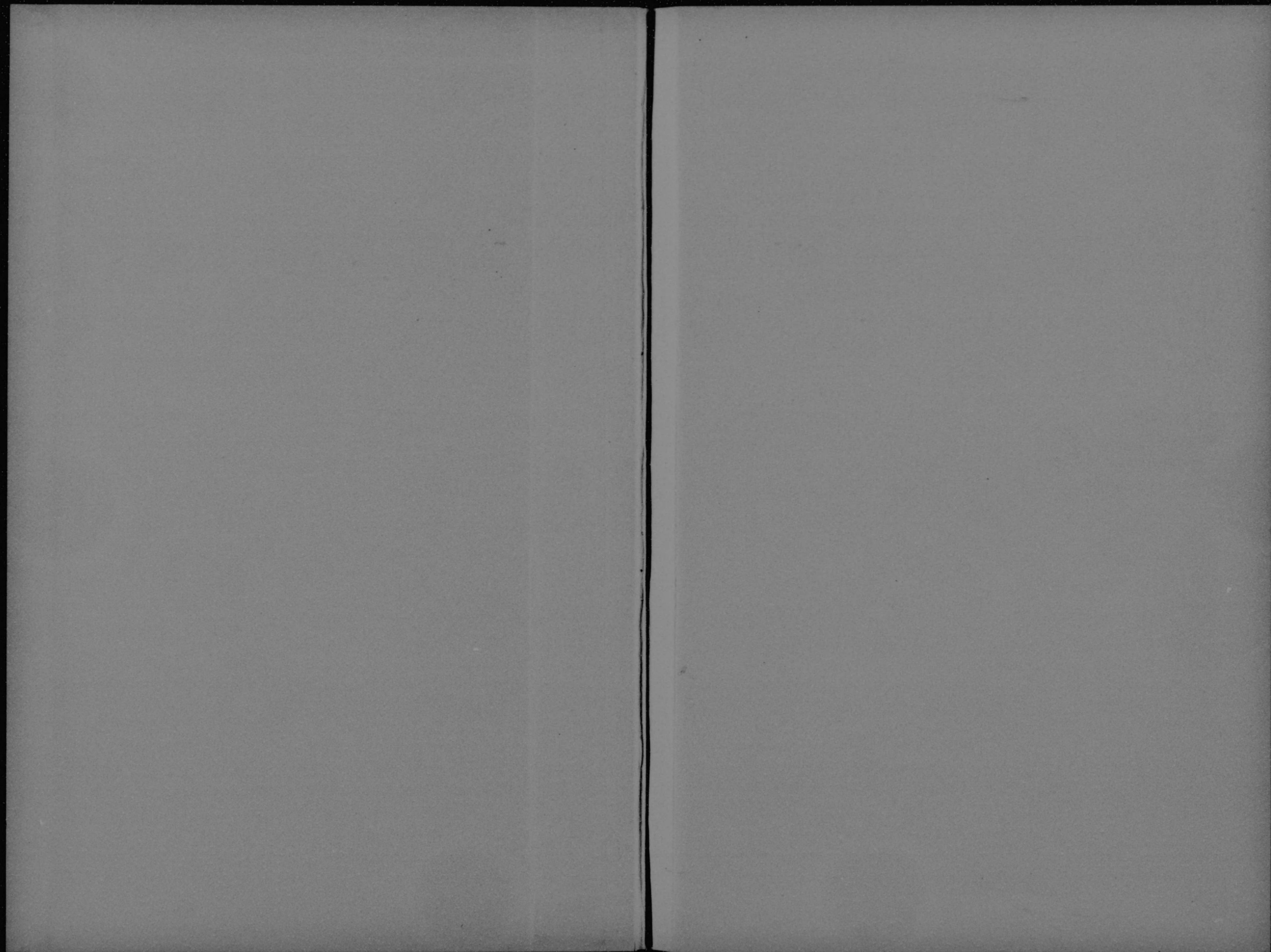
エト X 45.

〔〇二第〕	〔九一第〕	〔八一第〕	〔七一第〕	〔六一第〕
				岩倉市部編
				薩州山川ばい船聞書
				容内
				〔本文 菊判 三二頁〕
				〔寫眞 二面〕
				頒布價 金四拾錢
				送料 六錢











1  
5